

---

## 文 献 紹 介

---

### 『アウグスティヌス研究』

岡 野 昌 雄

アメリカのペンシルヴァニア州にあるヴィラノヴァ大学(Villanova University)のアウグスティヌス研究所 (Augustinian Institute) から 1970年以来毎年刊行されている『アウグスティヌス研究』(*Augustinian Studies*) についての書評を求められたが、もとより百篇を越す多数の論文について批評を加えることは不可能であり、評者の瞥見した範囲内で目についたものを少しずつ簡単に紹介しておくにとどめたい。

アウグスティヌス研究所の活動について詳しく知りたいと思い、3月初めに照会の手紙を送ったが、残念ながら返事を得られなかったので、『アウグスティヌス研究』誌から知られる限りのことを最初に記しておきたい。当研究所が設立されたのは、編集者の説明によれば、1967年のことであり、日常の活動については不明であるが、主なものとしては大体三つあるようである。第一には、研究所設立以前の1959年から大学が主催して毎年続けて来た「アウグスティヌス講座」(The Saint Augustine Lecture) の開催とその出版、第二に研究所設立の1967年以来行なわれている Augustinian Colloquium であるが、これについては、1970年に第4回目が開かれた旨の報告を最後に、『アウグスティヌス研究』誌の記録には見当たらないので、詳細は不明である。第三が紀要の『アウグスティヌス研究』の刊行である。

「アウグスティヌス講座」は国際的に著名な学者を招いて毎年行なわれているようで、極く一部を除いてほとんど印刷刊行されている。評者はそのうちの数冊を手にしたに過ぎないが、いずれも数十頁の短いものである。しかし、講演者の顔ぶれを見ると、アウグスティヌス研究或いは中世思想研究の上ですぐれた業績をあげた錚々たる学者が並んでおり、その演題も興味深いものばかりである。1959年第1回

目の Paul Henry (2回) を皮切りに, R. Klibansky, J. O'Meara (2回), A. Pegis, V. J. Bourke (2回), J. F. Callahan, H. I. Marrou, A. H. Armstrong, J. A. Mourant, M. T. Clark, G. Bonner, E. L. Fortin, J. Pépin, E. TeSelle, E. Lamiland, V. Verheijen, A. Pincherle と並ぶ様はまさに圧巻である。こうした一流の学者による簡潔な講演は, 研究論文や著書とまた違って, 見逃せないものが多いと言えよう。どのように運営されているのか詳らかではないが, 一大学の行事としては羨望を禁じ得ない。研究所長で編集責任者でもある R. P. Russell の手腕にでもよるのであろうか。

『アウグスティヌス研究』(年刊誌)は1970年に創刊されて以来, 既に11巻を数えている。各巻とも平均して約10篇前後の研究論文と数篇の Review Articles ないし Book Reviews が収録されている。書評など除いたこれまでの研究論文数は113篇にのぼる。数篇の例外はあるものの, すべて英語で書かれており, それがこの紀要の方針のようである。通常はドイツ語やフランス語で書かれているはずの論文がここでは英語で書かれているわけである。アウグスティヌス研究誌でわれわれが先ず思い浮べるのは *Revue des études augustiniennes* であり, 前身の *Année théologique augustinienne* (1940—1954) 以来国際的なアウグスティヌス研究専門誌として定評を得ているが, R. P. Russell への B. A. Paparella の献辞にもあるように(第5巻)英語によるアウグスティヌス専門の研究誌はこの『アウグスティヌス研究』が初めてと言ってよいであろう。これは画期的なことと言わねばならない。特にわが国のように, 英語を第一外国語として習得する人口が圧倒的に多い国では, この年刊誌によって受ける恩恵は測り難いものがある。勿論, 論文の質が問題にされなければならないが, 瞥見しただけでもかなりすぐれた論文が多いように見受けられる。また, 研究論文を寄せている著名な学者による Review Articles も得がたい収穫である。第2巻までの表紙裏に記されていた編集スタッフは, 編集責任者が所長の R. P. Russell, 補佐が B. A. Paparella, R. J. DeSimone (事務担当)の二人で, 更に編集参与として A. H. Armstrong, V. J. Bourke, P. Henry, H. I. Marrou, J. A. Mourant, J. J. O'Meara 等の名が挙げられている。以下, 第1巻から順次目についた論文を拾い出して簡単に紹介したいと思うが, 全論文に目を通したわけではないので, これはあくまでも評者の関心に基づく恣意的な選択で

あることを重ねてお断わりしておきたい。

第1巻(1970)は創刊号ということもあって、著名な学者による論文が多い。例えば V. J. Bourke : *Voluntarism in Augustine's Ethico-Legal Thought*, R. J. O'Connell : *De Libero Arbitrio I : Stoicism Revisited*, J. A. Mourant : *The Emergence of a Christian Philosophy in the Dialogues of Augustine*, E. L. Fortin : *The Political Implications of St. Augustine's Theory of Conscience* 等がある。第1巻の中で特に興味を感じたのは Robert E. Buckenmeyer : *The Meaning of *Judicium* and its Relationship to Illumination in the Dialogues of Augustine* であった。本巻中最も長い48頁という量にも比例して、なかなかの力作と思われた。論題からも明らかなように、アウグスティヌスにおける判断の問題を取上げているが、照明の意味を考察することから判断の意味を明らかにしようとする一般の傾向に対して、むしろ初期の哲学的著作を中心に判断の意味を明らかにすることによって照明の意味に光をあてようとしている。つまり、アウグスティヌスにおける判断の意味を専ら理性的判断の考察によって説明するやり方が、とかく神学的な問題連関の中にのみ限定されてしまうのに対して、人間にも動物にも共通する(感覚的機能に含まれる或る種の判断など)判断一般の分析から人間に固有な理性的判断の考察へと進み、それによって照明の意味を明らかにしようというわけである。そこで、大きく分けて動物と人間の感覚的判断の本性に関する問題と、理性的判断に関する問題の二つについて詳細に論じている。照明や判断の問題を神学的な問題連関の中にだけ限定せず、感覚論を含めてアウグスティヌスの認識論をできるだけ広い視野の中に取り出して論じようとしたことは注目してよいであろう。筆者の Buckenmeyer は第2巻でも *Augustine and the Life of Man's Being in the Early Dialogues* という論文を書いており、いわばアウグスティヌスにおける心身問題に関心をもっているように見受けられる。

第2巻(1971)で日につく論文としては J. H. Newton, Jr. : *The Importance of Augustine's Use of the Neoplatonic Doctrine of Hypostatic Union for the Development of Christology*, R. H. Nash : *Some Philosophic Sources of Augustine's Illumination Theory*, L. C. Ferrari : *Symbols of Sinfulness in Book II of Augustine's "Confession"*, W. Beierwaltes : *Zu Augustins Metaphysik*

der Sprache というところであろうか。Nash は 1969 年に *The Light of the Mind: St. Augustine's Theory of Knowledge* を出版し、アウグスティヌスの認識論について広汎かつ詳細に論述していたが、本巻の論文は特に照明説の解釈について更にそれを基礎づけようとするもので、アウグスティヌスの照明をプロティノスの影響から更に遡ってプラトンの思想にまで求め、またこの問題についてアリストテレスの影響を論ずるなど、かなり大胆で論議を呼ぶものと思われる。Ferrari の論文は『告白』第 2 巻の窃盗物語を中心に罪を表現するために用いられている諸象徴の意義について論じた興味深いものであるが、彼は第 5 巻以後毎年象徴の問題を中心に『告白』に関する論文を寄稿しており、その精力的な活躍が目される。

第 3 巻 (1972) の論文数は 8 篇でやや少ないが、C. Boyer: *Jean Calvin et Saint Augustin*, A. H. Armstrong: *Neoplatonic Valuations of Nature, Body and Intellect*, E. TeSelle: *Rufinus the Syrian, Caelestius, Pelagius: Explorations in the Prehistory of the Pelagian Controversy*, E. Lamirande: *Augustine and the Discussion of the Sinners in the Church at the Conference of Carthage (411)* や先述した R. E. Buckenmeyer: *Augustine and the Life of Man's Body in the Early Dialogues* 等、著名な学者による論文がほとんどで、中でも Armstrong の論文は、プラトン以上に彼岸的傾向の強い新プラトン主義が自然科学や芸術に積極的な影響を及ぼした点を論じたもので、やや独断的であると自ら断わりつつも、現代のプロティヌス研究の第一人者ともいべき筆者の論稿として興味深い。

第 4 巻 (1973) は論文数が最も少なく、6 篇を収録するのみであるが、*St. Augustine's Early Theory of Man, 386—391 A. D.* や *St. Augustine's Confessions: The Odyssey of Soul* の著者である R. J. O'Connell が、『自由意志』の終りの方で提出された魂の起源に関する諸説の中で特に“fallen-soul”説を取上げて論じた *Augustine's Rejection of the Fall of the Soul* と、F. E. Van Fleteren の *Authority and Reason, Faith and Understanding in the Thought of St. Augustine* の二篇が興味深い。後者については、昨年の中世哲学会のシンポジウムで評者も触れたことがあるが、アウグスティヌスの思想の中でも重要なテーマである知識と信仰の問題について初期著作を中心に行き届いた論述を展開しており、

きわめてすぐれたものと評価されよう。新プラトン主義やキリスト論との関連、また後期思想への展開などについて教えられるところが多かった。本巻にはアウグスティヌスのオスティア体験の神秘的性格をめぐる W. G. von Jess と J. A. Mourant の Discussion Article が載せられていて興味深かったが、この種の試みが本巻だけに終わっているのは残念である。

第5巻(1974)は、研究所の所長であり編集責任者である R. P. Russell の65歳祝賀論文集で、12篇の論文が寄せられている。目についたものを拾い上げてみると、『告白』第7巻第10章16節、第17章23節、第20章26節のテキストを詳細に分析し、更にカッシアクム対話篇とも比較検討してアウグスティヌスの魂の上昇体験について論じた F. E. Van Fleteren: Augustine's Ascent of the Soul in the Books VII of the *Confessions*: A Reconsideration, キケロの著作と比較しながらアウグスティヌスの *De Doctrina Christiana* 第4巻における修辞学の特徴について論じた E. L. Fortin: Augustine and the Problem of Christian Rhetoric, アウグスティヌスと新プラトン主義の関係でいつも問題になるアウグスティヌスとポルフィリオスの関係を特に400年頃を中心に論じた E. TeSelle: Porphyry and Augustine 等が興味深く読まれた。

第6巻(1975)には12篇の論文が収められているが、巻頭の論文は期せずして『告白』の統一性と構造の問題を取上げている。R. Flores: Reading and Speech in St. Augustine's *Confessions* と C. Starnes: Saint Augustine on Infancy and Childhood: Commentary on the first Book of Augustine's *Confessions* である。前者は「聞く」或いは「語る」という行為を視点にして『告白』の構造を分析したユニークなものであり、後者は『告白』第1巻のみの注釈ではあるが、『告白』全体を三位一体に模した三一的構造として捉えようという視点から書かれている。『告白』の統一性と構造という、いわば古くて新しい問題に接近する一つの試みと言えよう。本巻には他にアウグスティヌスの言語論を取上げてソシュールと比較した L. G. Kelly: Saint Augustine and Saussurean Linguistics という異色の論文や、また神の永遠性を表わす諸表現を分析してアウグスティヌスにおける永遠性の概念について論じた W. G. von Jess: Divine Eternity in the Doctrine of St. Augustine, 第7巻にも続く長篇の M. Lèveillé: Don de l'Esprit

et Baptême, 『告白』第3巻にあるモニカの夢の叙述の象徴的意味を論じた L. C. Ferrari: *Monica on the Wooden Rule*等がある。

第7巻(1976)には前述の M. Léveillé 論文の第2部が巻頭を占め、次に『告白』における「道」としてのキリストのいわばイメージを分析した L. C. Ferrari: *Christus Via in Augustine's Confessions* が続いている。またアウグスティヌスとカルヴァンの聖餐論を比較した J. Fitzer: *The Augustinian Roots of Calvin's Eucharistic Thought* や、1969年の「アウグスティヌス講座」の講演 Alberto Pincherle: *The Confessions of St. Augustine: a Reappraisal* などが入っている。

第8巻(1977)には11篇が収められていて、興味深いものも少なくないが、ここでは一つだけ D. E. Daniels: *The Argument of the De Trinitate and Augustine's Theory of Signs* を取上げておきたい。『三位一体論』の構成に関して第1巻から第7巻までと第8巻から第15巻までの二部に分ける解釈や、執筆年代を推定して更に細かく分類する考え方に対して、「理解を求める信仰」の原則に基づく統一性という視点から第1-第14巻と第15巻の二部に分けるという大胆な主張を打ち出し、『三位一体論』における議論の特色とサイン論を関連させて論じた、きわめて興味深いものであった。

第9巻(1978)は論文数に比して頁数が最も少なく、いずれも10頁前後のものばかりである。その中で目についたものの一つに B. S. Bubacz: *St. Augustine's 'Si fallor, sum'* がある。デカルトの 'Cogito, ergo sum' と比較しながら、自己認識の確実性における Fallor の意味を詳細に検討し、アウグスティヌスの疑いに対する深い洞察(筆者はそれを疑いの現象学と呼んでいる)の特色を指摘している。

第10巻(1979)から活字が変わったようで、余事ながら、いささか読みづらくなった感じがする。しかし、相変わらず精力的な L. C. Ferrari の論文が巻頭にあるし、アウグスティヌスとデカルトにおける cogito の類似性と相違について詳論した J. A. Mourant: *The Cogitos: Augustinian and Cartesian* は、前巻の Bubacz 論文とはまた違って、アウグスティヌスの思惟の特色を明らかに示し、読みごたえがあった。他に主な論文を挙げれば、J. P. Burns: *The Interpretation of Romans in the Pelagian Controversy*, W. S. Babcock: *Augustine's Interpretation*

of Romans (A. D. 394—396) といったところであろうか。

1980年2月23日に亡くなった F. C. Boyer への追悼文を巻頭に載せた第11巻 (1980) は最近手にしたばかりであり、しかも論文数もこれまでの最高で15篇もあり、全部に目を通すことはできなかったが、L. C. Ferrari: Paul at the Conversion of Augustine (Conf. VIII, 12, 29—30), B. S. Bubacz: Augustine's Illumination Theory and Epistemic Structuring, M. D. Jordan: Words and Word: Incarnation and Significance in Augustine's *De Doctrina Christiana* の三篇を挙げておこう。特に最後の論文はアウグスティヌスの言語論を理解する上で重要な視点を示していると思う。

これまで通観してみて気がついたことは、論文のテーマがいずれも真正面からアウグスティヌスに取組んだ、いわばオーソドックスなものばかりで、奇をてらったものや特殊すぎるものがないということである。しかも力作が多く、われわれの期待に十分に答えるものであった。英語圏でこれだけの専門研究誌が継続的に刊行されることを喜び、また日本の研究者の論文がいずれ掲載されるようになることを心から期待したい。